

5. きらめく動物たちの命と海 【久保田信の白浜だより(その23)】

クジラやイルカの白浜への漂着

クジラ類は、体長 34m、体重 190 t に達する世界最大の動物であるシロナガスクジラをはじめ、世界に約 77 種が現存する、陸から海へもどった哺乳類である。このうち、白浜町沿岸では 2004 年までに 8 種が記録されている。番所崎の磯浜で、クジラとイルカが近年に漂着した 2 例が著者によって確認された。最初の発見は 2002 年 6 月 11 日。マッコウクジラらしき歯が 1 個だった。イルカ類の生態を京都大学修士時代に御蔵島で研究した岸田拓士さんが正確な鑑定をしてくれた。太地町にある「くじらの博物館」の展覧室や標本収蔵庫もいっしょに調査して、問題の歯はシャチのものであることが分かった。

さらに岸田さんはその歯を真二つに切断し、磨き上げ、現れた縞模様を数えて年齢を割り出した。6 歳の若い個体であることを確かめた。シャチの雌は 10 歳前後で、雄は 15 歳前後で性成熟に達するので、この個体は『中学生』と言ったところだろう。太地町付近にはシャチが家族でやってくるので、白浜町付近でも泳いでいるはずだ。そんな時に何かの事故で死んだシャチの歯が抜け落ち、打ち上げられたのであろう。これは南紀生物誌 44 巻 (2002 年) に報告した。

1) ハンドウイルカの全身骨格を発見

もうひとつは、昨年、番所崎で発見されたイルカのほぼ全身骨格だ（図）。瀬戸臨海実験所のスタッフをはじめ、他大学の研究者や教員らが大量の学生を連れ、磯観察などで頻りに回っている所で、イルカ1体分の骨が埋もれていたのには驚いた。2003年8月19日、白浜町立児童館主催の自然観察教室の講師を務めた時の発見だ。55人の元気な子どもたちや付き添いの保護者といっしょに、円月島前の磯浜で生物観察をした。最後にと漂着物の観察をしていたところ、参加者の1人の林孝弥君が「犬の歯を1本拾った」と見せに来た。しばらくして、「もう1本同じのがあったよ」と持って来た。犬ではなく、イルカの歯と思われたその歯が、他にもまだ出てこないかと全員に発見場所へ集まってもらった。砂を少しずつ掘ってみた。すると、櫛のような嘴の部分の骨が現れた。その片側には林君が見つけたのと同じ歯がびっしり並んでいた。もう一方の嘴もすぐ見つかり、それにも同形の歯が並んでいた。

さらに深く掘っていくと、斜め下に向かった嘴の先に丸い頭骨が接続していた。続いて突起を3方向に伸ばした手のひらサイズの脊椎骨が並んで見つかった。その周りには小さな弓のようなろっ骨が何本もあった。骨はもう数十本を超えたが、観察会終了の時間となってしまった。

当時、児童館の溝端雅芳館長が、イルカの骨の発見もあった楽しい観察会だったと新聞社に連絡をとった。すぐにつけて来た紀伊民報記者といっしょに現場へもどり、骨を埋め戻した所を、今度はもっと丁寧に掘ってみた。今回はさらに深く掘り進めたので、残りの体半分の骨も出てきた。尾の骨、首の骨など、いろいろな骨が規則正しく埋まっていた。このイルカはU字状に折れ曲がって埋もれていたことも分かった。

後日、シャチを鑑定してくれた岸田さんに連絡をとったところ、すぐさま現場調査にやって来た。そして、発見場所の周囲も掘り返した。クジラ類は集団座礁することが知られていて、別個体が埋まっている可能性があったからだ。他の個体の骨は出てこなかった。実験所にもどって骨を並べた岸田拓士さんは、「ハンドウイルカ（＝バンドウイルカ）だろうが、近似種だったら面白い」と言い残し、この骨を京都に運んだ。

岸田さんは、友人の、当時同じく京都大学大学院生の森阪匡通さんと連絡を取り、骨の綿密な計測をした。さらに、この類の専門家である、当時、東京大学海洋研究所の天野雅男博士にも、このイルカの記載の確認や意見を聞き、ハンドウイルカであることがはっきりした。この3人とともに共著論文ができあがり、2003年の暮れに発行されたばかりの漂着物学会誌の第1巻に掲載された。

2) 白浜町へのクジラ類の漂着や迷入の記録

紀伊民報は面白い生物の記事をよく掲載することで全国的にも注目されている。記者が白浜周辺のクジラやイルカの最近の記事をいくつも知らせてくれた。これまで白浜町沿

岸海域に漂着したり、迷入したりしたクジラやイルカについてまとめたところ、過去半世紀で3科8属8種16頭の記録があった。シロナガスクジラ（後日間違って同定されたことが判明し、正しくはナガスクジラ）が1959年に綱不知湾に迷い込んでいる例もあった。最も多いのがハナゴンドウで、4回、4頭が記録されている。今回の発見によりハンドウイルカの2回、2頭が続く記録となった。残りの種はすべて1回ずつの記録であった。今後このような記録を続けていくことは大事な基礎データとなる。

3) ツノシマクジラの漂着

話は変わるが、1998年に日本海に浮かぶ山口県角島に新種のツノシマクジラ（ヒゲクジラ類）が漂着し、以前のデータとあわせて世界的に権威のある英国の『ネイチャー』誌



に、3人の日本人研究者が、昨年末に公表した。「白浜でも将来、『シラハマイルカ』という新種が漂着するかもしれません」と岸田さんは期待している。番所崎のハンドウイルカのほぼ一体分の骨は、現在は京都大学総合博物館で保管されている（約60個の骨は観察会に参加した小学生たちの宝物となっている）。

京都大学フィールド科学教育研究センターの発足に伴う特別企画展示展が2004年の春から夏にかけて京都大学総合博物館で開催された。当センターそれぞれの分野の研究を簡潔に紹介するパネル解説が並ぶ中、このハンドウイルカの骨もその一つとして展示され大勢の方々の目に止まった。

図. 白浜町の番所崎の浜に埋もれていた1頭のハンドウイルカの骨格（当時の筆者と大きさを比べて下さい）